

## 《研究報告》

# 『ぼくたちの おうちだよ!』

## —作品展での共同製作にむけて—

大屋幼稚園 赤 地 真 理

私が受け持つ“さくら組(4才児)”は、年少からの25名に、今年4月から7名が加わって計32名(男児20名・女児12名)の編成である。

子どもたちの様子は、遊び方・仲間関係(グループ)ともに、決まったものではなく、その時、その場の気分や状況次第で、ごく自然に仲間ができて、遊びが展開されるといったぐあいで、男女の隔たりもあまり見られない。

そのためか、新たに編入したほとんどは、あまり抵抗なくクラスの中にすんなりと解け込んでいったが、消極的でおとなしい女児二人だけは学級(集団)に馴染めず、孤立した状態で、担任の気がかりになっていた。

ある日、子どもたちのお家ごっこから発展した“ダンボールのお家”の製作をきっかけに、変化を見せ始めた二人の様子も交えて、桜組の共同製作をどのように進めてきたか、年少児の経過を織りまぜながら、考えた。

### 1. 年少児の活動の経過と子どもたちの様子

#### (1)かたつむりの木

・幼稚園に入って、はじめてみんなで一つの目的を持って、おこなった活動。

—それまでの桃組は(年少児の学級名)は、一人ひとりが園生活に慣れることが精一杯で、製作などは個々におこなうものばかりであった—

この製作も一人ひとりのかたつむりを一つの木に貼るといったものであったが、

「せんせい、これは(隣を指し)誰の？」と、自分以外の“ともだち”に対しての興味がはじめて示された。

物をつくるのが大好きな桃組の子どもたちで、この後も七夕行事にむけて飾りをみんなでつくったり、いろいろな経験を積んだ。

#### (6)作品展

。はじめて迎えた『作品展』。徐々集まる廃材、廃品に目を輝かせる子どもたち。

作品展がどんなものであるか、理解することから始まり、まず、どんなものをつくりたいのかみんなで話し合っ

て決めた。  
『電車』『ロボット』『お菓子のお家』と意見が三つに分かれ、更に話し合ったが、結局ちょっと欲張って三つづつすることにした。

まずはダンボールなどの廃材を切ったり、テープでつなげたりと個々に楽しんでいたが、次第にそれぞれ自分のつくりたい作品に分かれ、製作に取りかかった。

『電車』チームは、蒸気機関車へと変化させ、石灰入れなど工夫しながら、ほとんどの男の子が取り組んでいった。

『お菓子のお家』は、女の子全員で冷蔵庫など小物もつくりながら楽しんでいた。

『ロボット』をつくっていた数名の男の子が、次第に「電車」にも興味をひかれ、くっつけることになり、男の子全員で『ロボットの乗った電車』をつくることになった。

そうして製作を続けていくうちに、電車とお菓子の家がつながり、いろいろぶつかり合いながらも一つのものとなった。

それまでの子どもたちの共同製作に対する取り組みと、いままで経験を積んできたことの集大成を見出したい、という期待を持ちつつ始めた『作品展』での製作。

個々にバラバラで気にせず進んでいた。しかし、自然に“一緒にやろう。”という空気が流れ、意見や考えを伝え合っ

え、それ以降、友だちとのつながりを深めていく子どもたちであった。

その後も更に経験を積み、年少の一年を終えた。

## 2. 年少の一年の活動から学んだことと今後の課題

・入園した頃はバラバラだった子どもたちが、一年間同じクラスで遊んだり、ケンカをしたり、共同活動をしてきたことで、いろんな経験を積み、仲間への信頼感や愛情を育てていき、一つの学級というものが形成されたと思う。

・年少児にとっての共同活動は、他の学年に比べ、技術面や持続力、集中力といった精神面など、様々な面で発達が途上であるため、子どもたちの能力・発達段階・そして希望(要望)をよく考えながら、保育者としてヒントを与えながら、たくさん経験させてあげることも大切なのでは……と思った。

## 3. 今年度(年中)の活動の経過と子どもたちの様子

年中になり、7名の新入児を迎え新学期がスタート。意識しているわけではないのだが、新入児・在園児双方とも、いまひとつお互いに溶け込めないでいる。

そこで、年少の時の経験から、共同製作を通して仲間づくりに取り組むことを考えた。

### (1)段ボールのお家 Part1

特に動機づけのないまま始まった、大きなダンボールに絵を描いた“お家”の製作。

それまで経験を積んできた子どもたちは、自分たちの思いのままに絵を描き、色をぬったりして楽しんでいた。

しかし、新入児は何の経験もなく、また園生活の初期の段階だったので戸惑い、入っているものか様子をうかがっていた。

男の子は何とか一緒に製作に加わったが、二人の女の子は最後まで加わらずに見ているだけだった。

完成するとお家ごっこへと発展し、それから数日間、男児、女児ともに家族ごっこ

などをして楽しみながら遊び、またお家に愛着を示していた。

そしてある日、それまではただ遠くから友だちの様子を見ているだけだった二人の女の子(MとA)が、まわりに数人の子しか遊んでいなかったのがよかったのか、自分たちから行動をおこし、お家の中へと入った。

・お家づくりには加わることのなかったMとAが、でき上がった『お家』で時間的には短くても遊ぶことは、二人にとってかけがえのない時間であり、間接的な友だちとのつながりになったように思えた。

## (2)かたつむりのお洋服

季節がら“かたつむり”を題材にし、みんなで一つの大きなかたつむりの殻に模様をつける製作をした。

前回のお家づくりでは、加わることのできなかったMとAが、今回は最初から黙々と殻の模様づくりに励んでいた。

他の子と関わりながらという様子は見られなかったが、少しずつクラスの雰囲気慣れ一緒に行動することの不安が薄れてきたように見られた。

## (3)牛乳パックのお家をつくろう！

ある日、男の子数人を話をしていたところ、お家をつくって遊んだことの話になって「今度またお家つくろうよ。せんせい。」(N)

「でもつくったお家、すぐ壊れちゃったね。」(R)

「またつくろうか。今度つくると3回目だね。いっつも段ボールじゃ、つまらないよね。」

「じゃあ、今度は牛乳パックがいっぱいあるからレンガみたいのをつくって組み立てるっていうのはどう？」(保育者)

「レンガのお家ならさあ、なんかさあ『三匹の子ぶた』みたいだよ。」(S)

「そうだね～。2回もお家壊れちゃったしね。」

今度、牛乳パックのレンガでお家をつくらないかと、クラスの子どもたちに相談を持ちかけた。「いいよ。」という子に「え～、ヤダ。」という子、意見が分かれた。

「今度は段ボールじゃなくて、牛乳パックに新聞紙を詰めてレンガをつくって、それをブロックみたいに組み立ててお家をつくろうと思うんだけど…。」(保育者)

「『三匹の子ぶた』みたいに、レンガのお家つくるんだよね～、せんせい。オレたち子ぶたなんだよね～。」(S)

さっきまで「ヤダ。」といていた女の子が、

「じゃー、マリ先生がオオカミなんだ。」(Y)

「そうだよ。だって前のお家、先生が壊したもん。」(C)

(壊したんじゃないくて、片づけたんだけどなァ～。と心のつぶやき。)

「いいよ。いいよ。大きいをつくろう～。」と反対していた子も急にやる気になって、つくことにした。

牛乳パックに新聞紙を詰め、地道にレンガをつくり、少しずつ少しずつ積み重ねて、お家をつくる子どもたち。

どの子も真剣で、そして高くなるにつれ“もっと高く”と意欲が一層でてきて、互いに意見をぶつけ、「そこは水道」「物置もつくろうよ。」といろいろ工夫をし、作品づくりに励んでいる。

MとAも、この頃にはだいぶクラスにも慣れ、まだ自分から進んで入ってはいかないものの、友だちの誘いに乗って遊ぶようになり、でき上がりつつある『牛乳パックのお家』で、家族ごっこをする姿も見られるようになった。

共同製作をしたことだけではないと思うが、みんなと一つの目的をもって作り出すことでMとAもクラスの一員という意識が持てたのではないかと思う。

年齢の若い子どもたちの共同製作は、時として子ども同志の関わりが少ない集合活動として終わることも多い。

しかし、子どもがはっきりした目当てを持って共同製作に取り組む時、すばらしい成果を上げる。同じテーマで活動しているという連帯感、大きいものをつくるという

共通意識などが、価値ある体験を子どもたちに与えるように思われる。

初歩的な段階で、集団活動のおもしろさ、楽しさを知らせるのに、共同製作が役立ったことを土台に、これからもいろいろな環境を通して仲間意識を育てながら、学級づくり、集団づくりに励んでいきたいと思う。